

## 街全体で大川を

## 盛り上げていきたい

今回は株式会社プロセス井口の井口さんにお話を伺いました。

材料を売るからモノを作るへ

プロセス井口は昭和34年創業。井口小割製材所として、家具や建具の小割製材を行ってきました。井口さんは20歳のときに入社、その後30歳で跡を継いだとのこと。「平成16年には法人化し、社名を現在のプロセス井口にしました。そのタイミングが再



風浪宮に展示された組み立て式茶室  
(11/2 クラフトマンズデイ シュラインディング)

株式会社 プロセス井口  
代表取締役 井口 敬茂 さん

スタートだと思いました。当時はほとんど景気も悪くなっていたって、忙しい時とそうでない時の差も大きかったです。上の仕事量に左右されるままじゃだめだと思って、材料を仕入れて加工して販売する材料販売をはじめました」  
それから約5年後に別注家具製造の別会社株式会社 TRADES(トラス)を設立。「必要な機械を一つ一つ購入していくなかで、いつか自分もモノづくりをしたいと考えられるようになりました。また材料を東京や大阪などに売りに行っても、ある程度売り先も売れる量も決まってきました。じゃあどうしよう?と考えたときに、形にして福岡・大阪・東京などに売りに行こう。そして大川のPRをしていこうと思いました」  
38歳頃からは東京へ出向くことも増えられた井口さん。

現在は東京にも事務所とメンテナンス工場を構えられています。「やっぱり売りっぱなしじゃいけませんから。東京近辺の方からみると、九州・福岡・大川って遠いなと思われてしまっています。遠方のお客様にも安心していただけるように、メンテナンス等にも対応できる事務所、工場を構えました」  
プロセス井口では、大きな家具から小物の木工製品まで様々な物を製作されています。「大川はどちらかと言えば小物の制作が苦手で、そういういたものを作るところは少ない印象です。うちは材料も世界各国から様々な種類が集まりますし、加工の技術も塗装の技術もあります。そこにデザインを入れれば良いものが出来るし、小物であれば名刺代わりにもなります。貰われた方にも『こんなに良いものが





組み立て式茶室

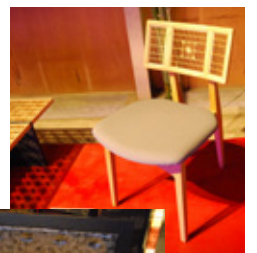
作れるなら、大きい家具を作っても安心よね」と思ってもらったのを狙って作り始めました。更に「材料の加工や卸販売、別注家具製造、建築部門も合わせた3つの柱で営業しています」ともお話された井口さん。家を建てるのが夢だったとのことですが、プロセス井口で全てを手がけられた家が11月に完成したそうです。「やっぱりうちは材料屋なので、周りが儲からないと自分のところに見返りが無いと思っています。家を建てることも出来る限り大川の技術を組み込みたいし、うちで出来ないことは他の事業所にやってもらいたいです。他の仕事でも例えば東京で椅子を100個作ってくれと言われても、自分の工場じゃ椅子を作れません。だから椅子を作れる事業所に『社長、仕事ありましたよ』と話を持ちかけます。それで見積もりを出してもらって、価格が合わないときはお客様の価格に合うように材料屋ならではの工夫も

したりしています。遠方のお客様も希望通りの価格で買えることができるし、事業所も仕事してもらえたりで各々にプラスになることがあります。それをずっと続けてきていますね」

### 外からわかった大川の良さ

大川市役所にも展示されている組み立て式茶室。この茶室をつくるに至ったきっかけについても伺いました。

「スタートは東京・八芳園様からでした。八芳園様といえは年間2000組近くが結婚式を挙げる、日本一の結婚式会場ですが、これまでもWAZAJAPANを一緒に立ち上げたデザイナーの紫牟田さんや田村さんと一緒にデザインを起こして、作る作れないを私が判断し、作ったものを八芳園様に納めるということとずっと続けていました。そのなかで、総支配人である井上専務から『組み立て式の茶室があったら、どこでも建てられるし、本当のおもてなしが出来るのに』という話が出て、じゃあ作りましょう！と始めたのが、最初ですね。うちは材料屋ですから使える材料はたくさんあります。どんどん試作を作りましょう！と言って、試作品を作って、そこにデザインを入れてもらって出来たのが無常庵です。八角形をしているのは八芳園様だからというのと、『八』は末広がりの数字で縁起が良いという理由があります。それから



プロセス井口が製作した家具や小物



あの茶室の中には建具の技術、組子の技術、中草の技術、木工の技術、LEDの技術など様々な技術が組み込まれています。あの茶室は職人さんの技術の集合体です」

昨年はグラミー賞の特別ラウンジでも展示された組み立て式茶室 無常庵。井口さんも現地に一週間ほど滞在されたとのこと。では現地での反応はどうだったのでしょうか。

「海外からの反応もすごく良かったです。『おー！なんだこれは！』って写真を撮ってましたね。その写真がたくさんの方の目に触れることで、大川を世界に広めてもらうことに繋がったと思います」

国内外問わず、大川の外へ多く足を運ばれている井口さん。そんな井口さんだからこそ、わかってきた大川の良さもたくさんあるそうです。

「灯台下暗しじゃないですが、ずっと住んでいるとわからないうち、外に出てこそわかる良さがたくさんありました。遠方に向いて仕事を見つけたら、

情報を分け合いながら切磋琢磨していきたいですね」

### 世界の大川に

大川にとつて、いまがチャンスだともお話された井口さん。「すこしいい風が吹いています。この風に乗って、あと2年間ぐらいで大川がどれだけ変われるかが勝負の鍵だと思っています。いずれは日本の玄関口でもある羽田空港に大川の良いものを置いて、たくさんの方に見て、触れていただきたいと思います」

様々な視点から、大川がより良くなるよう働きかけられている井口さん。そんな井口さんの夢はどのようなものでしょうか。

「個人的な、会社としての夢は、スタッフ・社員がいてくれるから私も仕事ができています。会社としての方向性、役割分担を皆で話しながら、時にはお酒を飲み交わしながら、楽しい職場づくりというのを、もっともつと目指しているのかな。くちやいけないなと思っています。また高校生の子供がいますが、跡を継がせてくれと言ってもらえるような会社になりたいですね。」

また大川が地方のモデル都市になっていけたらいいですよね。老若男女、業種問わず、皆が一丸となりながら『ものづくりの街・大川』というのを掲げて、日本一、そして世界一になりたいです。私は、そうなれると信じています。そうなるように責任を持ってやり遂げていきたいです」